

沈黙の春

ペンネーム 転倒虫

もう半世紀以上前のこと、ふと目にした新聞の新刊書評欄に「生物界にダーウィンの『種の起源』以来の衝撃」とあった。早速、書店に直行して購入。一晩で読んでしまった。それは、米国の海洋生物学者レイチェル・カーソンの「沈黙の春」であった。

当時の米国はDDT農薬散布や化学洗剤の廃液が環境に悪影響を及ぼすという認識が低く、「花は咲かない、鳥は鳴かない」という「沈黙の春」が出現し始めていた。自然環境破壊が進むとやがてその矛先は人間そのものに向けられるという恐ろしい地球の未来を指摘したのがこの書であった。

出版後、彼女は産業界やマスコミから猛反発を受けたが、年々彼女の指摘が正しいことが実証され、化学薬品の規制や廃棄物の処理が改良され現在に至っている。

一晩で読破出来たのは内容ばかりではない。巧みな自然描写と鋭い指摘の文言があったからである。この書が出版された2年後の1964年に死去したが、もし、今の地球を見たらどのように描写するだろうか。絶滅危惧種の増加、温暖化、プラスチック廃棄物の増加等、自然環境破壊は日々進み続けている。

この本は私にとって自然環境問題ばかりでなく日常生活での食事や健康までも考えさせてくれた。まさに青春時代の私にとっても衝撃の書であった。今では誰もが環境問題や自然保護を口にするが、「沈黙の春」がその原点であることを忘れてはならない。